

「ママの泣き顔で不安定に」「自信持てない」 親が離婚・私の気持ち聞いて

「自己肯定感が持てない」「結婚を考えられなくなつた」「子どもの頃、親の離婚を経験した若者たちが、気持ちを発信する動きが広がり始めている。夫婦の3組に1組が離婚する時代。子どもへの影響を最小限にするために、親や社会による心のケアが必要、との指摘もある。(杉山麻里子)

「結婚を反対され、既成事実を作るために私を妊娠したのに、離婚したら私は必要ないの?」

4月、東京都内でのシンポジウム。名古屋市の大學生(21)は今の思いを語った。父方の祖父母と伯母に育てられた毎日泣いていると、「施設

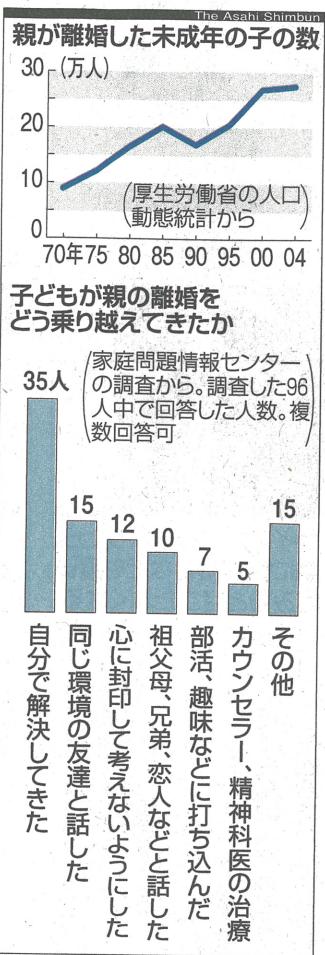
を入れるぞ」と脅された。再婚した母に会いに行つたことを責められ、ストレスで食べられなくなつたこともある。高校時代は気分の浮き沈みが激しかった女性(21)は、最近、交際相手ができるお

幼稚園の時に両親が離婚し、父方の祖父母と伯母に育てられた毎日泣いていると、「施設

を入れるぞ」と脅された。再婚した母に会いに行つたことを責められ、ストレスで食べられなくなつたこともある。高校時代は気分の浮き沈みが激しかった女性(21)は、最近、交際相手ができるお

幼稚園の時に両親が離婚し、父方の祖父母と伯母に育てられた毎日泣いていると、「施設

を入れるぞ」と脅された。再婚



シンポ・書籍で 子どもの発信相次ぐ

と「母は死んだ」と聞かされ、高校生で事實を知った。自分に自信が持てず、職を転々とし、カウンセリングに通つた。親の離婚について話せる場がなかなかない。そう感じ、4年前にインターネットの交流サイト(SNS)で親の離婚を考えるコミュニティを立ち上げた。最初数人だったメンバーも2千人に。直接話ができる場を、と今年、自助グループも始めた。3月の都内での集まりには10人が参加。「母が父の悪口」を言うので自分を否定されている気持ちになつた。自己肯定感がない、今も対人関係が苦手」(27歳女性)との声があがつた。

子どもの視点から親の離婚をとらえた出版物も相次ぐ。昨秋、発刊された冊子「心の絆を断たれた親子達2」では、4人の当事者が「親への手紙」を寄稿。1月刊行の「お父さんなんかいなくとも、全然大丈夫。」(泰文堂)では、小学生から大學生までの13人が、「ママの泣き顔を見ていると、自分も不安定になり、学校に行つても、教室に入れなくて保健室で過ごし

たなどと語つている。「離婚で壊れる子どもたち」などの著書がある棚瀬一代・神戸親和女子大教授は「離婚が子どもの心に与える影響は想像以上に大きく、対応を誤ると、いつまでも引きずることがある」と話す。自身の臨床経験から、①説明なしの突然の別居、離婚②監護する親の抑うつなど、長期間にわたる親機能の低下③別居する片親と会えない④学校、家族などのサポートの薄さ――などの条件がそろつと、不適応となる可能性が高まるという。家庭問題情報センター(東京)が2004年、親が離婚した子ども約100人に「親の離婚をどう乗り越えてきたか」などを尋ねたところ、「自分で解決してきた」との回答が35人で最も多かつた(グラフ参照)。

同センターの永田秋夫事務局長は「子どもに離婚原因や生活の変化をわかるように説明し、どちらの親と住みたいかなどの選択を迫るのはやめるべきだ。また、友達などに話しにくい思いを聞くNPOなどの支援態勢も作る必要がある」と話す。